

〈現〉と〈幻〉を渡る——梨木香歩作品群の世界——

佐藤宗子

梨木香歩は一九九四年に『西の魔女が死んだ』（楡出版）

でデビューしたが、その文庫化・映画化もあいまって、一般にも知名度は高い。その後の児童文学や一般文学の創作、エッセイを中心にした作家活動は、今年（二〇一四年）でちょうど二〇年になる。もっとも、その作品傾向ゆえにか、処女作以外に関わる論は、思いのほか少ない。本稿では、まずは「児童文学作家」の側面に限定せず、ほぼ五年ごと作品群に注目して検証し、作家・梨木が描く世界の特徴を把握することを通して、今後の作品への期待を浮き彫りにしていきたい（なお、岩波書店刊『海うそ』と角川文庫版『村田エフエンディ滞土録』、教育出版社の教科書・指導書以外は、新潮文庫版を参照した）。

『西の』は、九二年の湯本香樹実『夏の庭』（福武書店）とともに、現代の日常を描き、老人と孫世代の交流を描く作品として、一九九〇年代を代表するものといえよう。またいづれも文庫化により、広く一般にも親しまれている。もっともそれは、読者の「癒し」享受の面も否めない。

またOZON（NII学術情報ナビゲータ）の検索では最近も、描かれた主人公の不登校や内的世界を精神分析の観点から検証するといった論も出されている。さらに、祖母の造型については、先行する西山利佳、奥山恵、藤本恵の論を踏まえた倉田容子『語る老女 語られる老女——日本近現代文学にみる女の老い』（學藝書林、二〇一〇）所収の論を紹介しておきたい。倉田は「多様な文化的記号を一身に背負うおばあちゃんの死というドラマチックな結末」でさまざまな問題が「センチメンタリズムの彼方へと放逐される」こと、「〈西洋〉による〈東洋〉の啓蒙という帝国主義的なサブストーリー」が「感動的な筋書きのなかでは脱政治化され」ることなどを指摘する。

私としては、祖母の来日の時期と事情、母の存在がいずれも空白化された感がある点などが気になるが、「まい」に置かれた視点の回想形式である以上はやむを得ないのかも思う。他方、授業で本作を扱うと、日常的作品の結末で突如「不思議」が出来ることに混乱し困惑を示す学生